

令和7年度病害虫発生予報第4号

長崎県病害虫防除所長

【予報の概要】

農作物名	病害虫名	発生程度	
		現況	予想
早期水稲	いもち病（穂いもち）	並	やや少
	紋枯病	やや少	並
	穂吸汁性カメムシ類(注意報第1号)	やや多	多
普通期水稲	いもち病（葉いもち）	並	並
	紋枯病	並	やや多
	縞葉枯病	並	並
	セジロウンカ	少	やや少
	トビイロウンカ	少	やや少
	コブノメイガ	やや少	並
	穂吸汁性カメムシ類(注意報第1号)	やや多	多
大豆	ハスモンヨトウ	やや少	並
いちご (育苗床)	うどんこ病	やや少	やや少
	炭疽病	並	並
	ハダニ類	やや少	並
アスパラガス	斑点性病害(褐斑病、斑点病)	並	並
	アザミウマ類	やや少	やや少
かんきつ	かいよう病	やや少	やや少
	黒点病	やや多	やや多
	ミカンハダニ	やや少	並
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並
びわ	がんしゅ病	並	並
	灰斑病	並	並
	ナシヒメシンクイ	並	やや多
果樹共通	カメムシ類	やや少	やや少
茶	炭疽病	やや少	やや少
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並
	チャノコカクモンハマキ	やや少	並
	チャノホソガ	やや少	並
	カンザワハダニ	並	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並
	クワシロカイガラムシ	少	少

【発生予報】 本文の（ ）内は平年値

早期水稲

1. いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（22筆）の結果、葉いもちの発生を認めなかった（発病株率 2.6% 発生圃場率 29.2%）。

イ 7月前期の出穂後圃場の巡回調査（8筆）の結果、穂いもちの発生を認めな

った（発生を認めない）。

ウ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、穂いもちの発生を認めなかった（発病穂率 1.1%）。

(3) 防除上注意すべき事項

葉いもちの発生が認められる圃場では、穂ばらみ期と穂揃期の2回防除を行う。
また、穂ばらみ期を過ぎた圃場で葉いもちが多発している場合、穂揃期とその7～10日後に防除を行う。

2. 紋枯病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（22筆）の結果、発病株率は0.1%（0.3%）、発生圃場率は9.1%（9.7%）であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発病株率は11.0%（48.7%）であった。

ウ 7月8日時点での早期水稻生育状況調査（諫早市）によると、平年より茎数がかなり多い。

エ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

粉剤及び液剤は株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に散布する。

3. 穂吸汁性カメムシ類

令和7年7月16日付け**病害虫発生予察注意報第1号**による。

普通期水稻

1. いもち病（葉いもち）

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（66筆）の結果、葉いもちの発病株率は0.3%（0.2%）、発生圃場率は3.0%（3.9%）であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（過去10か年平均 発病株率0.4%）。

ウ 葉いもちの感染に好適な条件を満たした日は下表のとおりである（葉いもち感染好適条件判定モデルによる。詳細はホームページを参照）。

月日	鰐浦	巖原	芦辺	平戸	松浦	佐世保	西海	有川	長崎	島原	福江	口之津	脇岬
7/1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/9	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
7/10	-	-	-	-	3	-	3	3	-	-	-	2	3
7/11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	3	-
7/12	-	-	-	-	-	3	3	-	3	-	-	-	-
7/13	-	-	-	-	3	-	-	-	-	3	-	-	-
7/14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

発生指標	?:判定不能	-:好適条件なし	1:準好適条件1	2:準好適条件2	3:準好適条件3	4:準好適条件4	●:好適条件
------	--------	----------	----------	----------	----------	----------	--------

*感染した場合、感染好適と判断された日から7～10日後に病斑発現

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 余り苗、補植用苗は発病の伝染源となるので早めに処分する。
- イ 葉いもちの急性型病斑が見られた場合は早急に防除を行う。
- ウ 葉いもちの発生が認められる圃場では、穂ばらみ期と穂揃期の2回防除を行う。

2. 紋枯病

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

- ア 7月前期の巡回調査（66筆）の結果、発病株率は0.1%、発生圃場率は1.5%であった（発生を認めない）。
- イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（過去10か年平均 発病株率 0.1%）。
- ウ 7月8日時点での普通期水稻生育状況調査（諫早市）によると、平年より葉数と茎数が多い。
- エ 向こう1か月の気温はかなり高く降水量は平年並の見込みであり、本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

粉剤及び液剤は株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に散布する。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

- ア 7月前期の巡回調査（66筆）の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。
- イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。
- ウ 7月前期の巡回調査（66筆）の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.0頭（0.0頭）、発生圃場率は15.2%（16.8%）であった。
- エ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、ヒメトビウンカの発生を認めなかった（株当たり虫数 0.1頭、寄生株率 5.9%）。

4. セジロウンカ

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

- ア 7月前期の巡回調査（66筆）の結果、株当たり虫数は0.0頭（0.2頭）、発生圃場率は1.5%（40.4%）であった。
- イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（株当たり虫数 2.5頭、寄生株率 59.0%）。
- ウ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

5. トビイロウンカ

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

- ア 7月前期の巡回調査（66筆）の結果、発生を認めなかった（株当たり虫数 0.0頭、発生圃場率 3.6%）。
- イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（株当たり虫数 0.0頭、寄生株率 3.0%）。
- ウ 6月18日に黄色粘着板（諫早市）で初誘殺を確認した。その後、少数の飛来が6月5半旬、7月1半旬にあったと推測される（表）。
- エ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

表 トビイロウンカの誘殺状況(令和7年)

月・日	トビイロウンカ					(参考)セジロウンカ				
	諫早			北有馬	岐宿	諫早			北有馬	岐宿
	白熱	ネット	黄粘 (参考)	白熱	白熱	白熱	ネット	スマート	白熱	白熱
6/16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/17	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
6/18	0	0	1	0	0	0	4	2	0	1
6/19	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
6/20	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
6/21	0	0	0	0	1	0	0	0	4	0
6/22	0	0	0	0	0	0	1	1	0	29
6/23	0	0	0	0	2	2	0	24	0	44
6/24	0	0	1	0	3	4	0	4	0	12
6/25	0	0	0	0	0	1	0	51	0	0
6/26	0	0	0	0	0	1	0	4	0	3
6/27	0	0	0	0	0	2	0	6	0	3
6/28	0	0	0	0	0	2	1	3	0	0
6/29	0	0	0	0	1	1	0	2	0	1
6/30	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0
7/1	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0
7/2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
7/3	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
7/4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7/5	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
7/6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7/7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7/8	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
7/9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7/10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7/11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7/12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7/13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7/14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

※白熱: 60W白熱灯(予察灯)

※ネット: ネットラップ

※黄粘: 黄色粘着板(上端が水面から約40cmの設置高、畦畔から約3m入った圃場内に設置、両面の誘殺数) R7から設置開始

※スマート: スマート害虫モニタリングシステム(白色・青色・緑色LED+UV)

※データ欄の空欄は未調査、-は欠測

※表中赤線は気象庁発表梅雨明け(6/27頃)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 今後の圃場での発生状況に注意し、7月下旬～8月上旬にかけて100株当たり20頭以上の成虫の寄生が認められる場合は、幼虫ふ化揃い期に防除を行う。
- イ 株元に多く寄生するので薬剤散布にあたっては株元に薬剤が十分付着するように丁寧に散布する。
- ウ 圃場間や同一圃場内でも偏って発生していることが多いので、できるだけ圃場の見回りを徹底する。また、飛来波の今後の発生予測は図のとおりであるが、地域や圃場により発生状況が異なることがあるので、それぞれの圃場における発生状況を把握した上で防除を行う。

6. コブノメイガ

(1) 予報内容: 発生程度 並

(2) 予報の根拠

- ア 6月10日にフェロモントラップ(諫早市)で初誘殺が確認され、その後6月3半旬以降断続的に誘殺が確認されている。
- イ 県内各地のフェロモントラップでは、6月5半旬に長崎市、7月3半旬に対馬市で誘殺を確認した。

- ウ 7月前期の巡回調査（66筆）の結果、食害株率は0.3%（0.5%）、発生圃場率は18.2%（12.3%）であった。
- エ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（食害株率 4.5%）。
- オ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

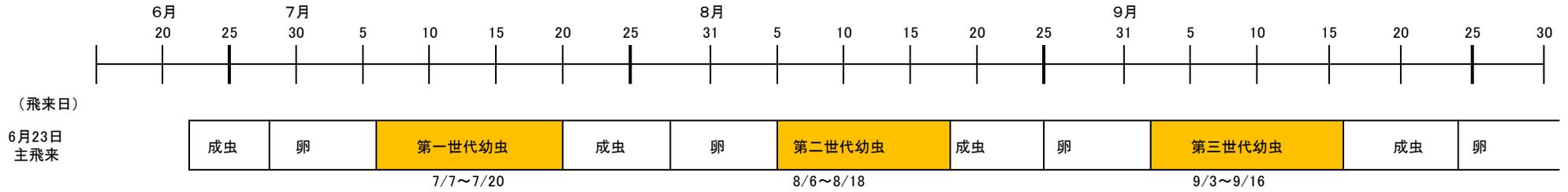
圃場間や同一圃場内でも偏って発生していることが多いので、圃場の見回りを徹底する。薬剤散布は、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後、粒剤では成虫発生最盛期に行う。

表 コブノメイガの誘殺状況(令和7年)

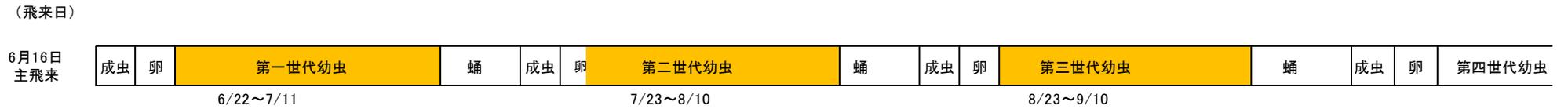
月・日	コブノメイガ				
	諫早	琴海	佐世保	波佐見	対馬
	フェロモントラップ				
6/6	0				
6/7	0				
6/8	0				
6/9	0				
6/10	1				
6/11	0				
6/12	0				
6/13	0				
6/14	3				
6/15	0				
6/16	7				
6/17	1				
6/18	0				
6/19	6				
6/20	0				
6/21	0				
6/22	0				
6/23	0				
6/24	2			0	
6/25	1				
6/26	0	1	0		
6/27	1			0	
6/28	0		0		
6/29	0				
6/30	1				
7/1	0	1	0	0	
7/2	0				
7/3	0				
7/4	0			0	
7/5	0				
7/6	0	0			
7/7	0		0	0	
7/8	0				
7/9	0			0	
7/10	0				
7/11	0	0			7
7/12	0				
7/13	0				
7/14	0				

※フェロモントラップ:(諫早)早期水稻5/16設置、(琴海)6/24設置、
(佐世保)6/26設置、(波佐見)6/24設置、(対馬)7/10設置

(図) トビイロウンカの発生予測図(令和7年7月15日時点)



(図) コブノメイガの発生予測図(令和7年7月15日時点)



※ 発生予測の気温は諫早市貝津町(農技セ)のデータを用いた(6/1~7/14実測値 7/15以降は1993~2022年の平年値)

大豆

1. ハスモンヨトウ

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠
ア フェロモントラップ（諫早市）の誘殺量はやや少で推移している（図）。
イ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。
イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫期に薬剤散布する。

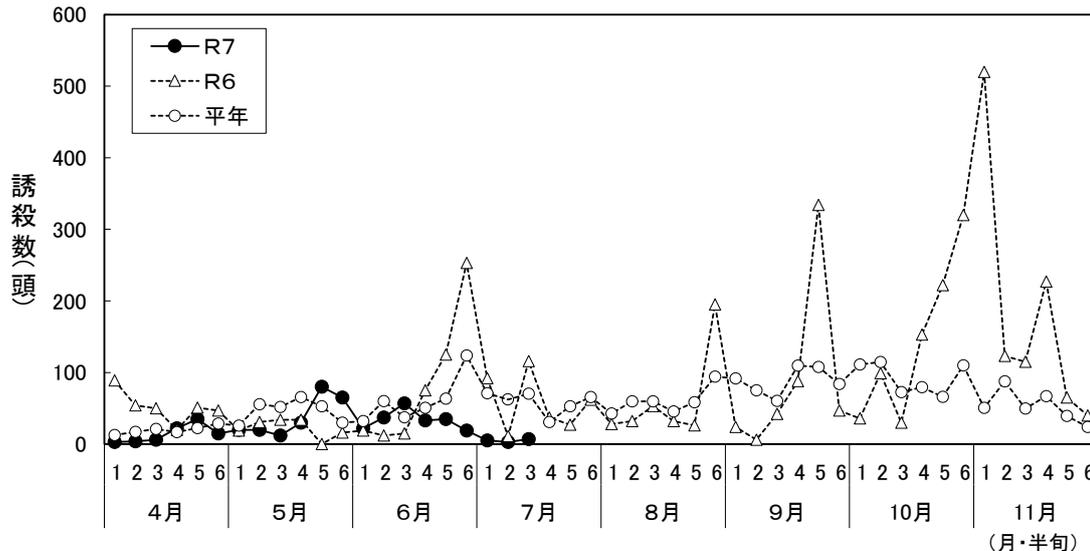


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況（諫早市小船越町）

いちご（育苗床）

1. うどんこ病

- (1) 予報内容：発生程度 やや少
- (2) 予報の根拠
7月前期の巡回調査（26筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率 0.2%、発生圃場率 2.0%）であった。
- (3) 防除上注意すべき事項
本病菌の本圃への持ち込みを防ぐため、定期的な防除を行う。特に「恋みのり」は「ゆめのか」に比べて葉で本病が発生しやすいため留意する。

2. 炭疽病

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠
ア 7月前期の巡回調査（26筆）の結果、発病株率は0.0%（0.0%）、発生圃場率は3.8%（4.0%）であった。
イ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本病の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 育苗床が多湿にならないように、長時間のかん水はしない。ポット間隔を十分にとり、排水対策を確実にを行う。また、除草を徹底するなど、環境整備に努める。
イ 育苗床は全面マルチを行い、降雨等による地面からの病原菌の跳ね上がりを防

- 止する。また、雨よけ施設がある育苗床では雨よけを行う。
- ウ 発病した子苗およびその周辺の苗は速やかに処分する。除去した発病株や茎葉は、圃場内やその周辺に放置しない。
- エ 葉の展開間隔にあわせて定期的に薬剤防除する。特に強風雨、台風などの前後や下葉除去など株に傷が付くような作業後は重点的に行う。
- オ 降雨が予想される場合の薬剤防除は、固着性の展着剤を加用すると効果が安定する。

3. ハダニ類

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（26筆）の結果、寄生株率は2.8%（4.5%）、発生圃場率は26.9%（31.0%）であった。

イ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

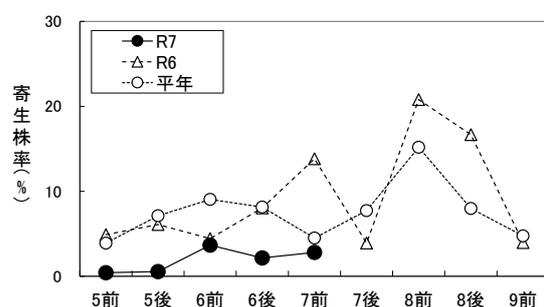


図 ハダニ類 寄生株率の推移(育苗圃)

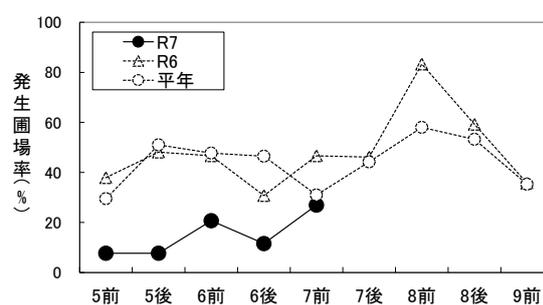


図 ハダニ類 発生圃場率の推移(育苗圃)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗による本圃への持ち込みを防ぐため、定植前までの防除を徹底する。

イ 土着天敵の活動が活発になる時期であり、天敵への影響が大きい薬剤の使用は避け、気門封鎖剤等の天敵に影響の少ない薬剤を積極的に使用する。なお、気門封鎖剤は卵に対する効果が低いので5～7日おきに連続散布を行う。

ウ 下葉の葉裏に多く寄生するので、薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布する。

エ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統の薬剤（令和7年長崎県病害虫防除基準P182～183の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の連用を避け、薬剤感受性低下の恐れが少ない気門封鎖剤や異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。

アスパラガス

1. 斑点性病害

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（7筆）の結果、発病側枝率は0.2%（0.7%）、発生圃場率は28.6%（23.6%）であった。

2. アザミウマ類

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（7筆）の結果、払い落とし虫数（10.5cm×22.5cm白色板に5回×10か所）は6.0頭（15.2頭）、発生圃場率は28.6%（59.5%）であった。

かんきつ

1. かいよう病

- (1) 予報内容：発生程度 やや少
- (2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（36筆）の結果、発病葉率は0.1%（0.4%）、発生圃場率は8.3%（23.6%）、発病果率は0.1%（0.1%）、果実での発生圃場率は8.3%（9.0%）であった。

2. 黒点病

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（36筆）の結果、発病果率は1.1%（1.0%）、発生圃場率は19.4%（5.9%）であり、一部多発圃場が見られた。

- (3) 防除上注意すべき事項

- ア 今後の気象（降雨）の推移に留意し、防除適期を逸しないよう努める。
- イ 臨機防除で薬剤を追加散布する場合は、各薬剤の使用回数に注意する。
- ウ 枯れ枝が伝染源となるので、管理作業と併せて剪除する。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（36筆）の結果、寄生葉率は5.3%（9.1%）、発生圃場率は25.0%（30.9%）であった。

イ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

- (3) 防除上注意すべき事項

薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和7年長崎県病害虫防除基準 P318～320およびP324～326の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

4. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（36筆）の結果、果梗部の被害果率は0.0%（0.2%）、発生圃場率は2.8%（7.3%）、果頂部の被害果は発生を認めなかった（被害果率 0.2%、発生圃場率 3.0%）。

イ 黄色粘着トラップ（諫早市）による誘殺量は、やや少～平年並である（図）。

ウ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

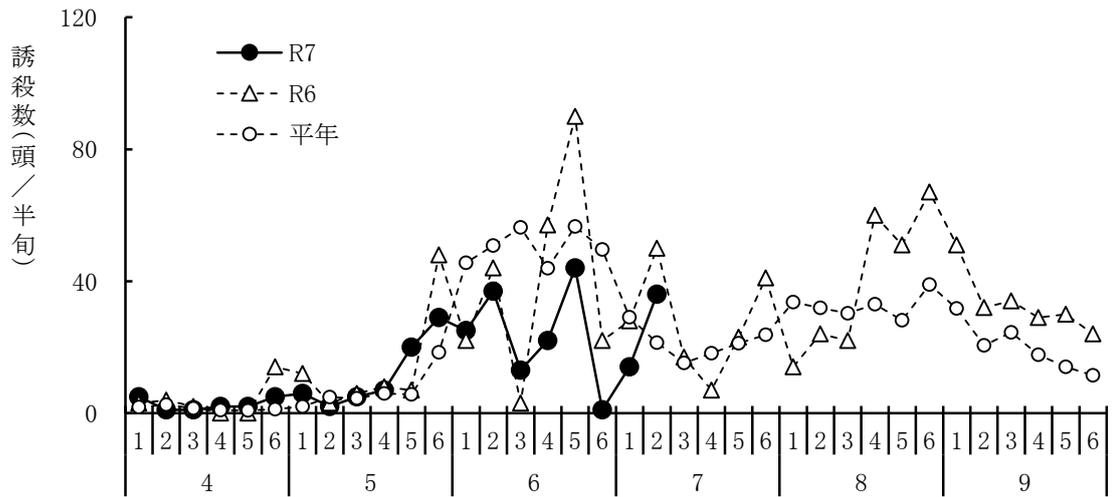


図 チャノキイロアザミウマの誘殺状況
(諫早市小船越町:黄色粘着トラップ)

(月・半旬)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した発生ピーク予測日を下表に示した。

イ 茶、かき、ぶどう及びイヌマキなどから移動して加害することがあるので、それらでの発生にも注意する。

表 有効積算温度計算シミュレーションによるチャノキイロアザミウマ成虫の発生ピーク予測日
(令和7年7月14日時点)

地点	長崎	佐世保	口之津	平戸
第5世代	7/29	7/31	8/2	8/13
〃 (平年)	8/3	8/5	8/5	8/18
〃 (前年)	7/26	7/26	7/27	8/7
第6世代	8/14	8/16	8/18	8/31
〃 (平年)	8/20	8/21	8/21	9/6
〃 (前年)	8/10	8/11	8/12	8/24
第7世代	8/31	9/2	9/4	9/21
〃 (平年)	9/6	9/8	9/7	9/28
〃 (前年)	8/25	8/26	8/28	9/11

注1: 発生ピーク予測日は気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した。
なお、積算には令和7年7月13日までは観測値を、以降は平年値を使用した。

注2: 同一地区内でも、山間部では発生ピーク予測日が異なる場合があるので注意する。
また、今後の気象条件により予測日は前後する場合がある。

注3: 表中の発生ピーク予測日の5日前から発生ピーク予測日の期間に薬剤散布をすると防除効果が高い。なお、発生が多い園では、1果当たり寄生虫数が0.1頭に達する前に防除を行う。

びわ

1. がんしゅ病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(10筆)の結果、発生枝葉率は0.5%(0.1%)、発生圃場率は30.0%(7.5%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病は樹体の傷口から感染するため、芽かきや剪定作業時はできるだけ断面（傷）が小さくなるようハサミを用い、作業後は速やかにペースト剤の塗布を行うなど、断面の癒合を促進する。
- イ 感染予防のため、整枝・せん定後や強風を伴う雨が予想される場合には、カスガマイシン・銅水和剤などを散布する。
- ウ ナシヒメシンクイの侵入口は感染経路となり、また病斑部にナシヒメシンクイが食入すると感染が助長されるため、本種に対する防除も併せて行う。

2. 灰斑病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（10筆）の結果、発生枝葉率は18.4%（15.2%）、発生圃場率は80.0%（78.8%）であった。

3. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（10筆）の結果、発生を認めなかった（寄生枝葉率0.0%、発生圃場率 2.5%）。

イ フェロモントラップ（諫早市）の誘殺数は、7月2半旬に急増した（図）。

(3) 防除上注意すべき事項

せん定痕から食入しやすいので、作業後は速やかにペースト剤の塗布を行うなど、断面の癒合を促進する。

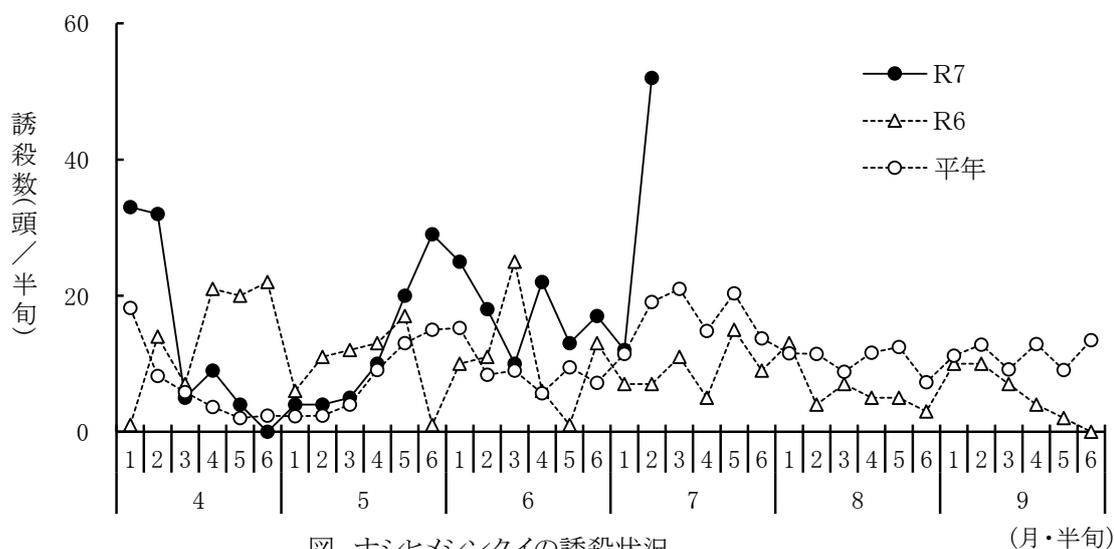


図 ナシヒメシンクイの誘殺状況
(諫早市小船越町:フェロモントラップ)

果樹共通

1. カメムシ類

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 予察灯（諫早市、南島原市、五島市）の誘殺量は平年並～やや少である（図）。

イ フェロモントラップ（諫早市、西海市、南島原市）の誘殺量は少～やや少である（図）。

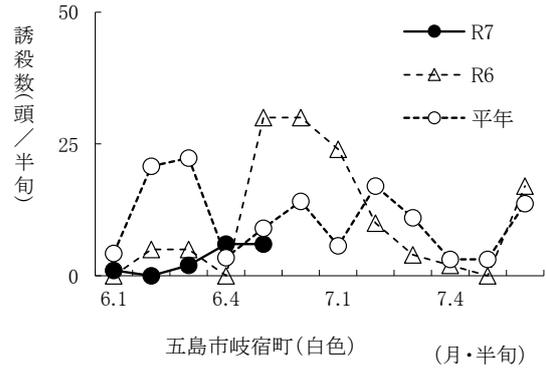
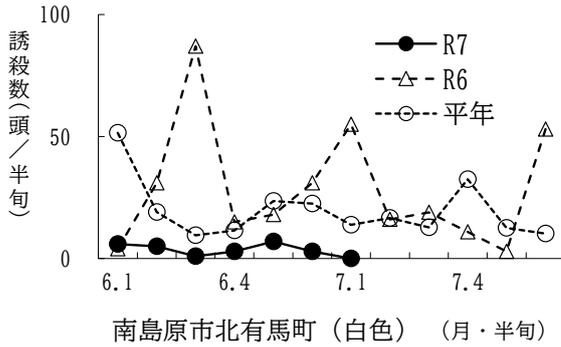
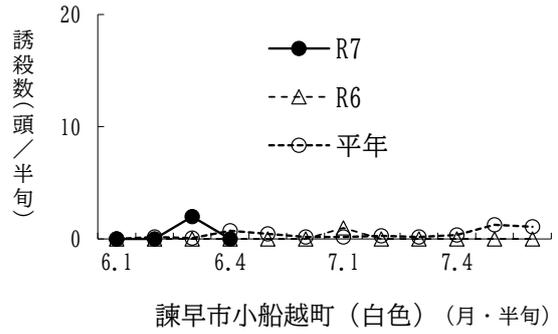
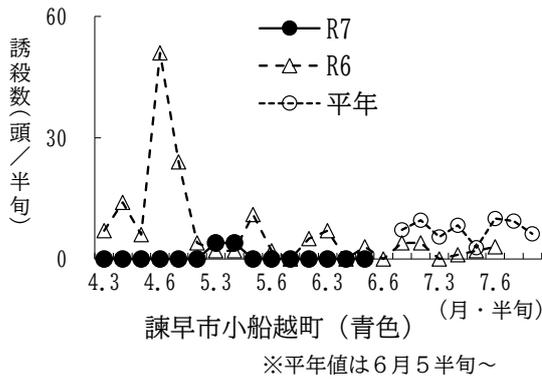


図 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ誘殺状況(予察灯:白色、青色)

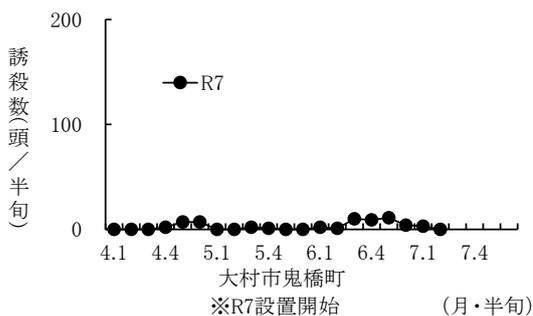
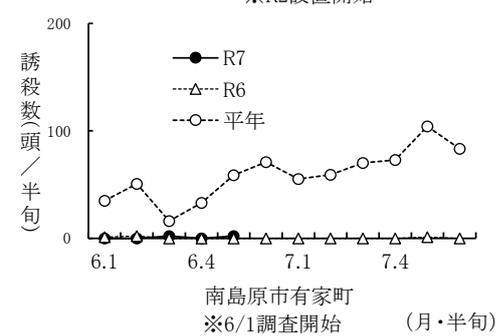
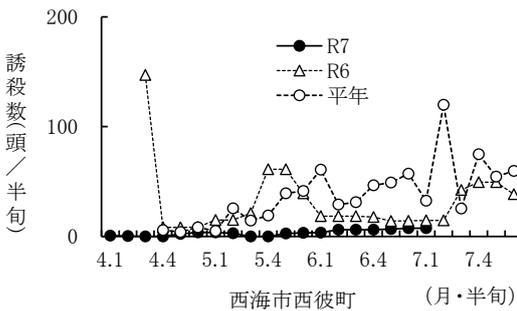
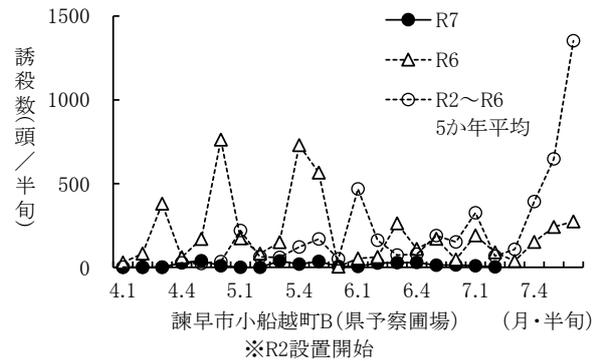
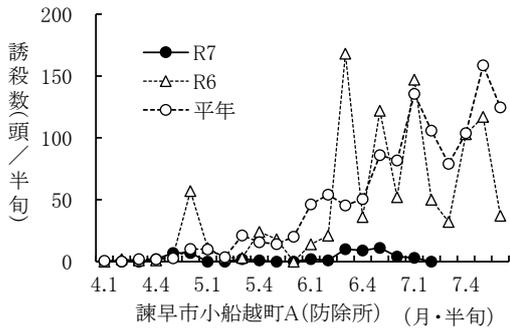


図 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(黄色コガネコール)

茶

1. 炭疽病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（12筆）の結果、1㎡当たり発病葉数は0.9枚（5.6枚）、発生圃場率は41.7%（58.0%）であった。

2. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（12筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は7.0頭（12.8頭）、発生圃場率は100%（88.9%）であった。

イ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

3. チャノココクモンハマキ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（12筆）の結果、1㎡あたり巻葉数は0.1枚（0.4枚）、発生圃場率は16.7%（20.4%）であった。

イ フェロモントラップ（東彼杵町）による誘殺数は平年並～やや多で推移している（図）。

ウ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

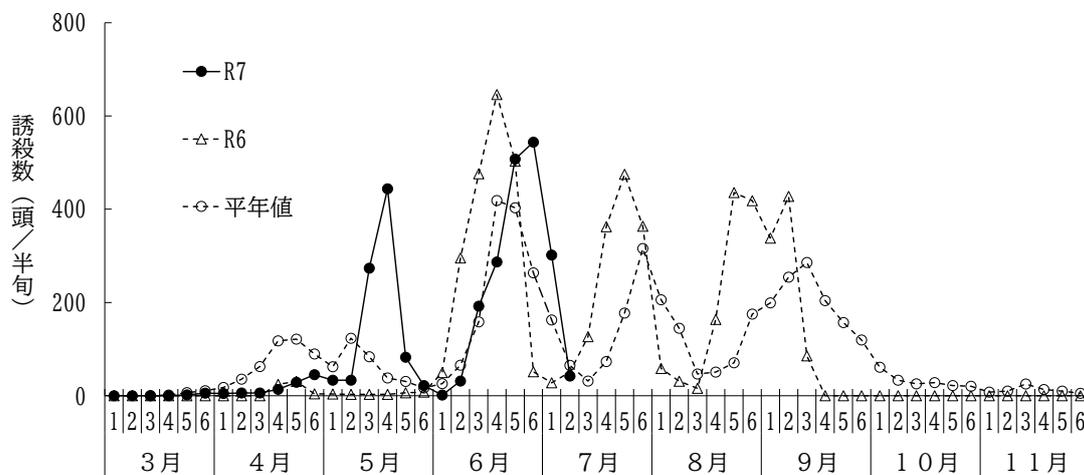


図 チャノココクモンハマキの誘殺状況（東彼杵町：フェロモントラップ）
※茶業研究室調べ

（月・半月）

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期の目安は、脱皮阻害剤（IGR剤）は発蛾最盛期の頃、その他の薬剤は発蛾最盛期の約7～10日後である。

イ 三番茶を摘採中あるいは近日中に摘採予定の圃場では、摘採終了後に防除を実施する。

ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和7年長崎県病害虫防除基準P349～350の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

4. チャノホソガ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(12筆)の結果、巻葉被害を認めなかった(1㎡あたり巻葉数0.2枚、発生圃場率11.2%)。

イ フェロモントラップ(東彼杵町)による誘殺数は、平年よりやや多く推移している(図)。

ウ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

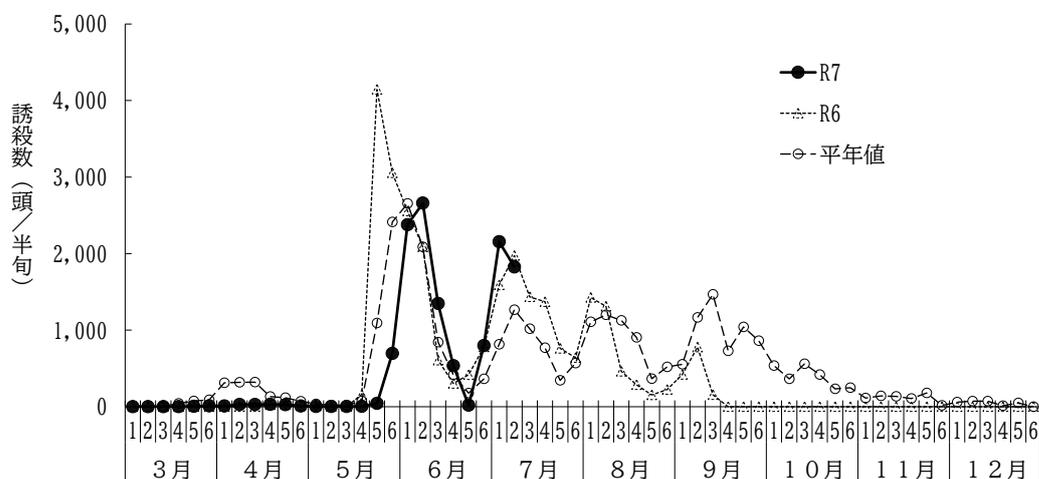


図 チャノホソガの誘殺状況(東彼杵町:フェロモントラップ) (月・半旬)
※茶業研究室調べ

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期の目安は、脱皮阻害剤(IGR剤)は発蛾最盛期の頃、その他の薬剤は発蛾最盛期の約7~10日後である。

イ 三番茶を摘採中あるいは近日中に摘採予定の圃場では、摘採終了後に防除を実施する。

ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統(令和7年長崎県病虫害防除基準P349~350の「作用機構による分類(IRAC)」参照)の薬剤は連用しない。

5. カンザワハダニ

(1) 予報内容:発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(12筆)の結果、寄生葉率は0.2%(0.5%)、発生圃場率は8.3%(10.4%)であった。

6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容:発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(12筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイ)は2.8頭(3.6頭)、発生圃場率は91.7%(71.1%)であった。

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容:発生程度 少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(12筆)の結果、発生を認めなかった(寄生株率4.1%、発生圃場率29.8%)。

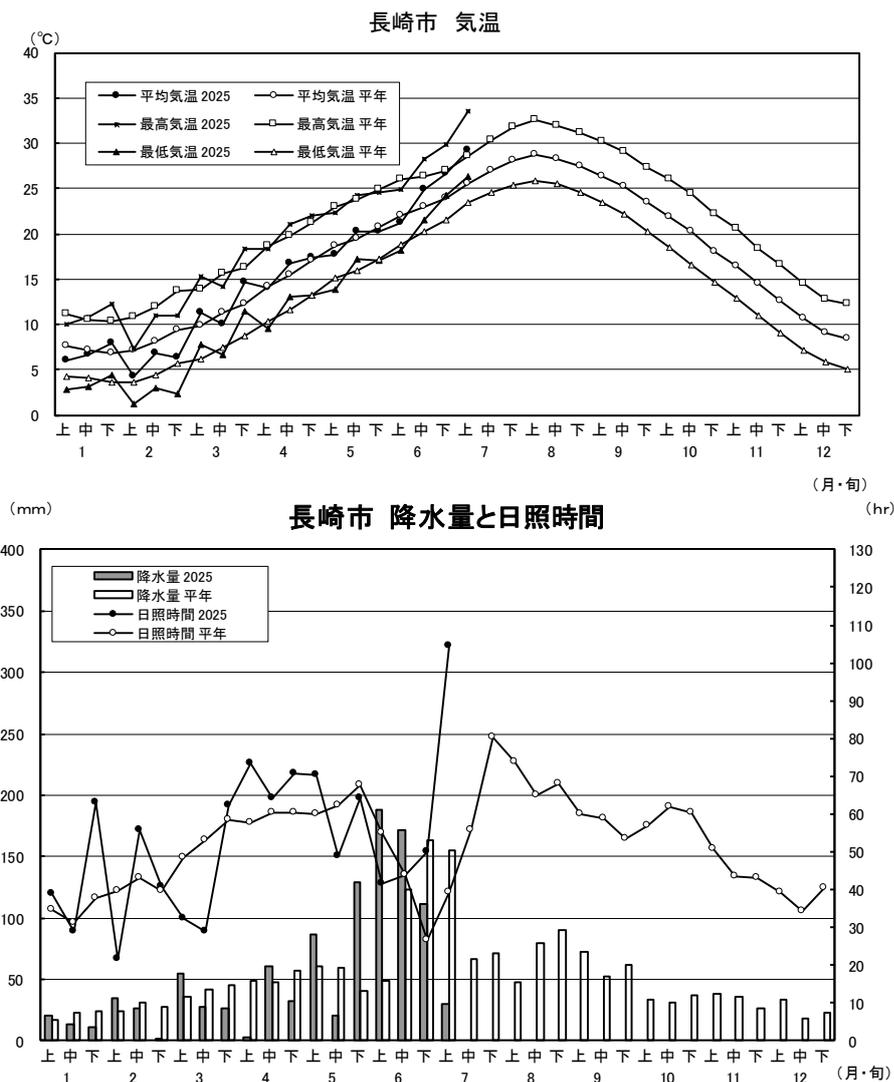
【参考】

(令和7年7月10日発表 1か月予報 福岡管区气象台)

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	10	20	70
降水量	30	40	30
日照時間	20	40	40

※予報対象地域：九州北部地域

令和7年の気象経過(長崎地方气象台)



- 6月から8月までの3か月間を「農薬危害防止運動月間」と定め、農薬事故を防止する運動を実施しています。
- 長崎県病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。
「長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室
(長崎県病害虫防除所) ホームページ」アドレス

: <https://www.pref.nagasaki.jp/e-nourin/nougi/JPP/index.html>

- この情報に関するお問い合わせ
長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室
(長崎県病害虫防除所) TEL: 0957-26-0027

